

和英辞典編集実務の立場からのユーザーフレンドリネスの原則と オンラインディクショナリーの可能性

須 部 宗 生

I はじめに

過去30年近く辞典作りに係わってきた筆者であるが、この期間は大きく2つに大別できる。即ち1995年に出版された『研究社新編英和活用大辞典』に代表される英和形式の辞典の編纂に参加した10年を第1期とするならば、2003年出版の『研究社和英大辞典第五版』（以下和大）に要した8年にその後の当辞典のオンライン化に伴いスタートし現在に至る和英部門の用例収集の10年を加えた合計18年を、和英形式の辞典に参加した第2期とすることができよう。従って英和辞典編集からスタートした筆者の辞典作りではあるが、現時点では和英辞典の仕事の期間の方が英和辞典のものの2倍近くになったわけである。が、いずれにせよ、辞典編集の実務に携わる課程で筆者が常に心がけてきたのは、どのような点に注意を払えばユーザーにとって役立つ辞典になるかということであった。それ故本小論においては、英和辞典に対しやや劣勢に立たざるを得なかった過去の日本の和英辞典とその将来的な存在意義を確認することから論を起し、その上で紙ベースの和大の改訂を概観したい。次にオンラインディクショナリーとはどんなものでありまた紙媒体辞典に対しどのような利点や可能性を秘めたものかを見届けることとする。また筆者がメンテナンス実務に参加している『研究社オンラインディクショナリー (KOD)』（以下KOD）とはどのようなものかを説明し、最後にユーザー目線に立ったユーザーフレンドリーな辞典とはどんなものであるか、その原則は如何なるものであるかに関し、必要な辞書学的な考察も交えながら辞典編集実務者としての筆者のメモと経験を基に、具体的な工夫や改善の提言

を試みるものとする。最後に付記しておくが、筆者が本小論にて挙げた具体例は最近数年間の実務の中で残したメモであるが最終的に掲載した具体例はそのほんの一部のものにすぎず読者はこれらの背後には類似した用例が多くあることを想起されたい。

II 英和辞典に対し劣勢に立たされた和英辞典の過去・今後の使命

明治以降特に英米の学術書等の翻訳が急務であった日本の立場を反映して辞典編集に関しては英和辞典に力点が置かれてきたと思われる。日本における本格的な英和辞典は、英和辞典編集家の竹林が言うように、およそ130年前にさかのぼるようである¹⁾。その後辞典出版社が競って英和辞典を出版し内容的な改善も図られ質的な向上も実現していった。その一方で和英辞典の進歩は英和辞典の陰に隠れる形で大きく出遅れることとなった。しかしその後の世界の情勢は大きく変化し、第二次世界大戦後高度成長を成し遂げた日本は世界から注目される存在となった。これにより日本は世界に向かい大いに日本を発信していく必要が生じ、ようやく和英辞典の開発に目が向けられるようになり、わが国でも和英辞典が出版されていった。因みにわが国の最初の和英辞典は、自ら和英辞典の編集家でもありその道の研究者でもある小島が指摘するように、約110年ほど前のプリンクリーによる『三省堂和英大辞典』²⁾あたりがその始まりのようである。その後各社が和英辞典の編纂を手がけていった。しかしその後も出版された和英辞典はほとんどが小型の学習和英辞

1) 竹林滋他『世界の辞書』研究社 1992 p.505 1.3

2) 同上 p.548 ll. 17~18

典を脱することはなかった。大型の和英大辞典となるとごく少数で内容的にも英和辞典に比べると遅れていたと考えられる。日本におけるほぼ唯一の本格的な大型和英辞典の編纂は1918年の『武信和英大辞典』が始まりとされる。当辞典は1931年に『研究社和英大辞典』として生まれ変わりその後の第二次世界大戦の混乱期における1949年の増補版を経て1954年に勝俣詮吉郎主幹による『研究社和英大辞典第3版』、1970年に増田綱主幹の『研究社和英大辞典第4版』と改訂を重ねた。その後他社でも大型の和英辞典が少数ながら出版された。例えば『NEW齊藤和英大辞典(日外アソシエーツ辞書編集部)』などである。しかし未だに出版された和英辞典の多くが小型のものであることは厳然とした事実には他ならない。これは日本における和英辞典の発達の遅れの証拠と認めざるを得ない。折りしも今の日本を取り巻く環境は東北大地震などの悪影響もあり厳しいものがあることは否定できない。かつて日本が得意としていた電気製品メーカーのソニーやパナソニックも苦境に立たされていると聞く。さらに自動車部門での他国の追い上げも無視できない。しかし日本にはこのような工業製品以外にも得意分野はある。例えば、iPS細胞の開発やアニメ技術などを代表とするクールジャパン戦略などの知的財産が多くあり、辞典作りの技術もそのオンライン化を含め世界に誇るものの出来るものであると思われる。21世紀に入り十数年が経過した日本では今、2020年の東京オリンピック招致や近い将来の富士山の世界遺産登録の実現の可能性も取り沙汰されている。このような現在、日本に求められているのはまさに発信力ではないだろうか。従ってこの発信を可能とするために、今日本に求められるものは英和辞典よりもむしろ、日本を英語で世界に向けて発信するための優れた和英辞典であると断言できよう。

Ⅲ 『和大第五版』改訂と意義

さて前述の『和英大辞典4版』は、質量共に進歩し日本人だけでなく特に日本文化に興味を抱く外国人ユーザーの間でその装丁の色

から「グリーン・ゴッデス(緑色の女神)」と賞賛され1992年時点で26刷を記録している。しかしながら本辞典がそれなりの売れ行きを実現した理由はその内容が著しく優れていたことではないと考えられる。その売れ行きのよさはむしろ他に同じサイズの和英辞典が日本国内に欠如していたからに他ならないと思われる。「緑色の女神」が象徴する長所、例えば皇室典範、能、歌舞伎などの分野の記述にはむやみに詳しいものの、その後その欠点も指摘され始めた。即ち、用例の古さやバランスの悪さ、女性蔑視や軍国調を暗示する表現が散見される点、ハイテク用語の少ななども目立ち始めた。また和の大改訂作業を共に行った早稲田大学教授のポール・スノードン氏が指摘するように、英語からの逆訳表現³⁾も見受けられた。このような反省点と世の要請を受ける形で1993年から2003年に大改訂作業が開始され筆者も氏と共に参加し、逆訳の排除を含めて多岐に渡る改良に努めた。当改訂は最終的に48万項目を収録することとなる大規模なものとなったがその具体的体勢的及び方法論的な特徴を列挙してみると1) 日本語の専門家の参加により大型国語辞典を凌ぐ項目の充実を目指した点 2) 日本人15人、英米豪人15人の執筆者の少数精鋭主義による協力体制 3) 大規模な日本語コーパスの活用 4) コンピューターの活用などであった。また主たる改訂点としては、1) 旧版に対し40パーセント強の増加となった点 2) それまでローマ字表記であったものを仮名見出しに変更した点 3) 複合語を太字表記とし各ページを3段印刷にした点などであり、これらの変更により安易な形で外国人ユーザーの便宜を図ることは避け、例えば同じ音の「恋仲」と「濃い仲」の区別が楽になった。また4) 図表、図解などを多用し、百科事典的な要素を強化した点、例えば相撲、柔道、式の読み方、昆虫の体の構造などを示した。さらに5) 世界の固有名詞、団体名、法律名、作品名、人名を豊富に掲載した点、6) 英語

3) *English Lexicography in Japan* The Jacet Society of English Lexicography Taishukan Publishing Company 2006 p. 148 ll.4~7

教育関係者だけでなく、実業に携わるビジネスマンなどの要請に対応すべく、時事的用語、カタカナ語、IT関係の新語を強化した点、などである。以上のような具体的な改訂により紙媒体ではあったもののその後多くの電子辞書に活用されるなど、名実共に時代的要請に応えた『研究社和英大辞典5版』の意義は大きかった。

IV 紙媒体辞典および電子辞書の限界とオンラインディクショナリーの可能性

以上のように多大な労苦と長い時間を投じて成し遂げた改訂作業は前述の通り、それなりの意義があったと思われる。しかしながら完成した紙媒体の辞典やそのデータを単に機械的に電子化しただけの電子辞書には否定できない限界性もあることも歴とした事実である。即ちそれは出版されたその時点から時代の変化に取り残されてその内容が古くなっていくという事実他にない。この伝統的な辞書の限界性という事実はこれまで当然のこととして諦められてきた。つまりそれを解決することは永遠に不可能であると当然視されてきたのである。しかしオンラインディクショナリーはこの問題をいとも簡単に解決してしまった。言ってみるならば、時の流れの影響も一切受けず、永遠に経年劣化しない、夢の次世代型辞典が実現してしまったのである。なぜなら、オンラインディクショナリーの場合では、時代の変化や進展に合わせて随時追加、変更、削除が可能であるからである。ここでこのオンラインの特性を如実に示すと思われる具体例を示したい。

「証券取引法」「金融商品取引法」

2012年3月14日付けの読売は「ライブドア敗訴確定」の記事を掲載しその中で2004年改正の「証券取引法」(現・金融商品取引法)について言及しているが、両法の変化についてKODは懇切丁寧な説明を施している。これはオンライン化されて初めて可能となったことである。これは紙ベース辞典や電子辞書とは異なり常に内容を変更加筆できるオンラインディクショナリーの強みの一例と考えられる。このような類例は枚挙の暇がない。

このようにオンラインディクショナリーはユーザーが引く度に新たな内容を検索できる、進化し続ける辞典である。またオンラインディクショナリーサービスとはユーザーが管理者でもある情報配信側に少額のアクセス料を支払い自分のパソコンで利用できる辞典サービスの仕組みである。さらにオンライン化はかつての紙媒体辞典やその情報を単に機械的に取り込んだだけの電子辞書が有する限界性を解決しそれを超越した利点や可能性があると考えられる。例えば、紙媒体辞典がその性質上大量のパルプ消費による森林破壊の原因だと指摘されるが、オンラインディクショナリーはそのような環境問題の解決につながるだろう。また紙媒体の場合ではその限られたスペース制約の下で常に情報のスリムダウンを余儀なくされたが、オンラインではその問題が克服された。さらに紙媒体や電子辞書の場合、一旦製品化されてしまうと情報内容の変更には次の改訂を待たなくてはならず、めまぐるしいほどに早い世の動きについていけないという問題があったが、オンラインはそれを見事なまでに解決してしまった。またオンラインディクショナリーをよく使う翻訳家や語学研究者たちは、かつて多数の分厚い辞典類を書齋に並べて参照しながらの作業をしていたが、今はオンラインにより、コンピューター一つに向かって作業ができるようになり、格段作業効率があがり研究環境が整ったとコンピュータディクショナリーを絶賛していると聞く。またオンラインディクショナリーは、ハワード・ジャクソンの著の中でその訳者の南出が挙げるように様々な形の検索即ち、「ワイルドカード検索」「ハイパーテキスト検索」「ブール演算子検索」⁴⁾などが可能である。またKODでも入力した文字列で始まる全ての単語が検索できる前方一致検索、入力した文字列で終わる単語を検索できる後方一致検索、入力した文字に相当する単語を検索できる完全一致検索、成句や句動詞を検索できる成句検索、英語の用例・例文を検索できる用例検索、英和・和英を問わず、見出し、

4) ハワード・ジャクソン著 南出他監訳『英語辞書学への招待』大修館書店2004 p.99 ll.11~25

成句、用例などの英単語をまとめて検索できる英字総合検索などの検索が可能であり非常に便利である。尤も中学生や高校生など英語の基本的な知識を学ぶ初学者の場合には紙媒体辞書の存在意義はあながち否定されるものではないが、正確で最新情報をピンポイントで素早く必要とするビジネスマンなどにはオンラインディクショナリーは欠くことのできない仕事をするための基本的なツールになりつつあるようである。

V KOD (Kenkyusha Online Dictionary) およびメンテナンス作業

以上オンラインディクショナリーとその可能性に関して概観したが、ここで筆者が特にその和英部門の用例収集という形でそのメンテナンスの実務に携わっているKODとはどんなものであるかを概観したい。KODとはKenkyusha Online Dictionaryの頭文字語であり多数の基本辞典即ち 1) 英和系辞典(リーダーズ英和辞典、リーダーズプラス英和辞典、新英和大辞典(以下英大)、新英和中辞典、ルミナス英和辞典) 2) 和英系辞典(新和英大辞典、新和英中辞典、ルミナス和英辞典、カタカナで引くスベリング辞典) 3) 用例系辞典(新編英和活用大辞典、総合ビジネス英語文例事典) 4) 専門・応用辞典(理化学英和辞典、英和コンピューター用語辞典、研究社医学英和辞典、研究社ビジネス英和辞典) 5) 日本語系辞典(三省堂大辞林、日本語表現活用辞典、類義語使い分け辞典) 6) アーカイブ辞典(新英和中辞典第6版、新和英大辞典第4版、新和英大辞典第4版) 7) オプション英英辞典(Oxford Advanced Learner's Dictionary)など研究社の辞典だけでなく内外他社の辞典をもドッキングさせた膨大な辞典情報にオンラインの命とも言える新語情報を中心とするメンテナンスにより支えられている総合辞典情報のオンラインサービスのことである。また市販されている各々の紙ベース辞典も新改訂に伴いオンラインにその情報がアップデートされる仕組みである。利用会員は個人会員と法人会員に大別され利用料金体系も異なる。個人会員

は個人単位の申し込みであるが、法人会員とは会社、学校単位の申し込みとなり、法人全体に係わるスタッフが各々のデスクでの利用が可能である。最近内外の大学や企業単位の法人会員が増加中であり合計百を越すと聞く。

筆者が行っているこのKODなるもののメンテナンスの具体的な作業は、2003年から現在に至るまで日本を代表する一般紙である読売新聞を毎日読破して、主として新語・新表現・新情報を見つけてそれを和英部門のメンテナンス担当者の責務として他の数名の和英部門担当者と共に、KODの本部に送付及び提案をすることである。因みに英和部門ではメンテナンス担当者が別において、英和の立場から類似した仕事を同時進行的に行っている。では何故情報ソースとして一般紙かということであるが、一般紙は読者が一般人であることが前提でありそこで使用される表現や語彙は専門家でなくてもわかるはずの、いわゆるハウスホールドワードとして確立されたものであり、その記事内容が容易に理解できるように工夫されているからである。言い換えれば、一般紙で取り扱われている語彙や表現は一般に人口に膾炙したものと考えられ辞典の情報としては最適なものと考えられるのである。また何故読売新聞かと言えば、当紙は日本で最大の読者を有する新聞であるからに他ならない。因みに他社の有力紙は他のメンテナンス担当者が活用してはいる。またKODとしては情報ソースとしてのインターネット活用はしない方針を貫いている。ではなぜ利用しないかであるが、インターネットは不特定多数の人たちが自由に書き込むことが出来、その責任所在も明確でなくその内容は誤った情報が混じることが多いと考えられるからである。他社のものとしてインターネット情報を活用して作成されたと思われる辞典も見受けられる。しかし多くの場合不純物を混入させる結果をもたらしてしまうようである。インターネットを活用すれば確かに用例収集に多大な労苦と時間が省けるだろう。それに比して毎日新聞の中で新情報を見つけるのはあたかもアナログ的な効率の悪いやり方だと言われるかもしれない。だが安易な方法

に頼って誤った情報を取り込む危険は避けなければならない。もちろん如何に着実な方法であっても人間の成せる業であるから完璧は期すことはできないかもしれない。しかし少なくとも、業務の手法を明らかにし、万が一間違いを起こした場合には自らその責任を取るという責任所在の明確化を確立することが、辞典編集者の社会的責務に則った基本的な態度であると考えられる。

VI 辞典編集の実務者の立場からの工夫・改善の提言

前章で主として辞書学的な立場からみたユーザーフレンドリネスとは如何なるものかを論じた。ではここでは以上のことも踏まえ、筆者が辞典編集の実務に携わってきた者の立場から読売新聞のニューワードウォッチから得た具体例を列挙したい。その上でどのような点に工夫を施しどのような改善をすれば読者のためになり、使い勝手が向上するかという視点に立って改善点の項目を27点ばかり列挙し、辞典編集という実務の課程で最近数年間に残したメモをたよりに論じることとする。

辞典の改善項目27

- 1) より高度な客観性・普遍性を確立する
- 2) 『和英中辞典』(以下和中)『ルミナス和英辞典』(以下ル和)などの小型辞書の強みに学ぶ
- 3) 大型辞典の強み(絶対的の語彙数の多さ)
- 4) 見出し語に加えるべき語彙(意外な落とし穴に注意)
- 5) 「クロスレファレンス」の充実
- 6) 加えたい略語
- 7) 用語の揺れの問題
- 8) 新聞を中心とするジャーナリズムが流す不適切な使用語彙の問題
- 9) 表記の要統一性
- 10) 日本史用語および国際舞台で活躍する日本人の扱い方
- 11) 情報内容の刷新
- 12) 言い換え表現のための [] や省略を示す () の使用

- 13) 短命で終わる事象や過去のものの取り扱い方
- 14) 有用だと思われる用例表現の追加
- 15) 辞典間での誤差の解消
- 16) 訳語の充実・追加
- 17) 対応語彙の充実
- 18) 語彙検索の際のヒットし易くする工夫
- 19) 意味の追加
- 20) 英和・和英の相互補完性の増大
- 21) 人名記述における没年などのスピーディーな追加
- 22) 誤ったインターネット情報の問題
- 23) 新しい法律名などの扱い
- 24) 新しい和製英語の扱い
- 25) 判りやすい説明の追加
- 26) 英米以外のものの追加
- 27) 微妙な日本語表現の追加

では以下に上記の各テーマ別に筆者がKODのメンテナンス作業において出会った具体例を列挙し考えていきたい。

1) より高度な客観性・普遍性を確立する

①「国防委員会」

現段階でのKODは「国防委員会」の説明を「旧ソ連の」と限定してあるが、「ソ連」体制が過去となった事情も考慮に入れ、特に最近の北朝鮮のキムジョンウン体制の過激な動きが目立つ情勢下では「北朝鮮・旧ソ連の」と説明を変えたい。

②「いのちの電話」

自殺対策基本法に則り様々な取り組みを行っている「日本いのちの電話連盟」が2012年2月8日の読売新聞で、いのちの電話に対する相談件数の増加傾向を報告している。しかし現段階でのKODは「命の電話」と表記している。これは当然ながら「いのちの電話」の表記に改めたい。困みにKODの医学辞典は「いのちの電話」と正しくひらがな表記してある点は評価するものの、その訳のhot lineは和大のa suicide hot line; a suicide-prevention hot lineの訳を見習うべきであろう。

③「地域包括経済連携」

現段階のKODには「包括的連携協定」

comprehensive partnership agreement と「包括的経済連携協定」 comprehensive economic partnership agreement (CEPA) はある。しかしこれに最近ASEANの主導の下に論議されつつある「地域包括経済連携」 regional comprehensive economic partnership (RCEP) を加えたい。

④「雨林」

使用頻度が多いと思われる「熱帯雨林」をいきなり見出し語とはせず和中のようにその基本語である「雨林」をまず見出し語とした上で、「熱帯雨林」「多雨林」「温帯雨林」などの用例を提示したい。

⑤「鄭州商品取引所」「インターコンチネンタル取引所」「インド国立商品・デリバティブ取引所」

2012年5月11日の読売は「世界の取引所の商品先物取引規模ランキング」を発表しているがその中の3位の「鄭州商品取引所」(中国)、6位の「インターコンチネンタル取引所」(欧州) および10位の「インド国立商品・デリバティブ取引所」(インド) を加えたい。尚「インターコンチネンタル取引所」は現段階のKODにも記載はあるが欧州のものはない。

⑥「チャールズ・オルソン」

現KODは各界で国際的に著名であると思われる人物の記載は積極的に行っている点は評価される。是非ともこのポリシーは継続強化されるべきだと思われる。この方向で考えた場合、例えば20世紀アメリカの詩人である「チャールズ・オルソン」の記載を加えるべきであろう。因みに20世紀のドイツの詩人である「パウル・ウェラン」の記載はある。

2) 和中之ル和等の小型辞典から学ぶ

KODの中であって特に和英辞典の立場から断言できることは語彙、用例共に和の大の優越性は揺るぎのないものであるということである。しかしながら和は大は時として語彙収集に力点を置きすぎたためか時として小型の辞典の丁寧な語彙説明に軍配を上げざるを得な

い事態が散見される。辞典編集は大局的に見る「鳥の目」と細かく見る「アリの目」が同時に必要であろう。以下具体例を見たい。

①「ノストラダムスの大予言」

これはかなり有名で子どもでもごく普通に知っていると思われる用例である。しかし和大は人物としてのノストラダムスは載せてはいてもそれ以上に有名な「～の大予言」には直接言及していない。当然和大の語彙説明、訳、用例の豊富さが小型辞典を勝る場合の方が圧倒的に多いことは確かではある。しかし時々この具体例のように小型辞典の記述が勝るとも思われることもある。もちろん小型大型の辞書が持つ長所短所もすべて同時に検索できるオンラインディクショナリーにはそれ自体で相互補完的であるという強みもあることは確かである。しかしユーザーは潜在的に小型辞典より和大のような大型辞典に対して信頼をより強く寄せているはずである。従って大型辞典は小型の長所をそれ自体でそっくり取り込む必要があると思われる。

②「顔見世興行」

和大にも用例としてはあるもののこれを和中之ル和などのように見出し語として昇格したい。

③「清風明月」

和大にも「～明月」として立てたい。また少なくとも、和中之ル和の「清風」の比喩的用法は和大よりも優れていると認めざるを得ない。

④「上代仮名」

和大には「上代特殊仮名遣い」であるがより一般的な言い方だと思われるこれもル和のように入れたい。

⑤「日中文化交流協会」

ル和にあるこれは当然和大にも入れるべきだと思われる。

⑥「横穴墓」

これも前者同様入れたい。

⑦「ロールコール方式投票」

これは2012年8月30日の読売新聞によると、アメリカの大統領候補者が獲得した代議員数を郷土自慢を交えて発表するという

やり方のものであるが、これもル和にあるように和大にもほしい。

- ⑧「国連環境開発会議（地球サミット）」
これは和大にもある。しかしル和のように（ ）内の用語との関連付けの記載にあるような丁寧な説明があると尚いい。
- ⑨「後顧の憂い」
和大にも「後顧」のところにこの用例はある。しかしル和や和中のようにこれ全体としての見出し語がほしい。
- ⑩「蟻の穴から堤が崩れる」
ル和にあるようにこれも必要であろう。
- ⑪「インディペンデント・オン・サンデー」
和中にはこの新聞名の記載がある。和大にもほしい。
- ⑫「所蔵品」
和中のようにこれもほしい。
- ⑬「行動半径」
ル和のように、「彼の～は広い」などの比喩的な用例がほしい。
- ⑭「とげぬき地蔵尊」
ル和にはこの用例がある。和大にも入れるべきだと判断されるが、ル和には和大の盲点を補ってくれる編集上の長所が随所に見られる。

3) 「大型辞典の強み」

以上でどちらかと言うと和大の欠点と言うべきものを見てきたが、前述したように和大のような大型辞典が小型辞典を圧倒的に凌ぐ点の方がその逆よりも多いことは絶対的な事実でもあり、大型辞典の強みは何と言ってもあらゆるジャンルを網羅するその語彙の豊富さである。筆者が今までに集めたその具体例はここで紹介するもののおよそ百倍にも及ぶが、そのほんの一部をアトランダムに紹介したい。便宜上その意味説明は原則として省略する。

- ①「ポアンカレ予想」
- ②「公園デビュー」
- ③「黄色靱帯骨化症」
- ④「キャラ弁」
- ⑤「機械遺産」
- ⑥「8020運動」

- ⑦「コンビニ受診」
- ⑧「買い物弱者」
- ⑨「自炊」（紙の本をスキャナーで読み取り自前の電子書籍を作ること）
- ⑩「粘りの投球」
- ⑪「かりゆし」
- ⑫「歴女」
- ⑬「池ポチャ」
- ⑭「職域加算」
- ⑮「小三通」
- ⑯「老障介護」
- ⑰「造反議員」
- ⑱「墨書土器」
- ⑲「交通弱者」
- ⑳「採点ミス」

4) 和大のような大型辞典にも抜け落ちたと考えられる意外な語彙

- ①「化粧まわし」
相撲は日本の文化を象徴する代表的なスポーツである。和大はこのような日本文化を扱う語彙に関しては収録語数がかかなり多いはずである。しかし大型辞典も、神の完璧さを目指すことはあっても所詮人間の成せる業であり、時としてこの語彙が示すようにうっかり抜け落ちることもままある。また不思議なことにこのような盲点に強いはずのル和や和中にも見受けられない。しかしこのような語彙こそKODのメンテナンスを任せられた者として発見すべき仕事と自覚しており、数は少ないもののこのような語彙や用例に遭遇した折には単純でハードな作業の中での疲労を癒してくれる、発見の喜びを感じる瞬間でもある。当然早急に加筆されることになるがこのような用例としては筆者の記憶にある限り「首振り人形」などがある。

- ②「インボイス」
2013年1月13日の読売新聞は自民党が導入を考えている「インボイス（税額票）制度」に関して掲載しているが、KODではインボイスの説明として「送り状」を載せている。しかし『ASCIIjp デジタル用語辞典』によると、「送り状、納品書、請求書」

などの訳が列挙されている。またここにある「税額票」との絡みも含め説明に一工夫が必要ではなからうか。

③「踏み台」

元来的な意味の用例は当然ある。しかしこれはパソコンの遠隔操作によって悪用されてしまうパソコン、という新しい意味で使用されている語彙である。電子書籍に関する用語である「自炊」は既に掲載されているがこのような新しい語彙を増強することは、即座にそれを発見した時点でそうすることが可能であるオンラインディクショナリーのメンテナンスを託された実務者の醍醐味でもある。

④「組織工学」

この語彙は新たに「システムエンジニアリング」として入る予定ではあるが、この漢字表記の言い方からも検索可能にすることがユーザーフレンドリーな辞典をして必要なのだと思われる。

⑤「ガンツフェルト実験」

これは超心理学の用語である。意味は離れた2人が心を伝え合うことができるという現象である。超心理学はやや自然科学の原理から外れる故、科学的真理から外れると軽視されがちではあるがおよそ人間の考えることや人間に関することは事の貴賤は問わず、実際に載せていくというのが辞典編集の基本的姿勢である。従ってこの語彙も必要である。

⑥「バイト代」

和大にもこれと同義の「アルバイト代」はある。しかし普通に言うこの言い方も入りたい。

⑦「後方かかえ込み2回宙返り3回ひねり(リ・ジョンソン)」

これは最近日本の体操界のホープ、内村選手がフロアで決めた大技である。これも入れたい語彙と考えられる。

⑧「スポーツテスト」

これは和製英語の典型だと思われるが日本の学校制度の中で定着している語彙であろうと思われる。これも入れたい語彙である。

⑨「擬似好天」

気象用語という意味ではやや特殊だと思われるものの、この現象が原因で登山者が遭難死することもあるようだ。あるべき語彙であろう。

⑩「ガメラ」

かつて子どもたちを熱狂させた怪獣の一つである。「ゴジラ」「ウルトラマン」「地球防衛軍」などは既にある。それ故これも採用すべき語彙だと判断される。

⑪「ガッシャーブルム I、ガッシャーブルム II」

これは世界の高峰の内の1つである。既に和大は世界の高峰を13掲載している。しかし2012年5月27日の読売新聞が世界の高峰を14紹介していたので比較してみるとこのガッシャーブルムがIとIIに分けて掲載されていることが判明した。登山家の間ではこの分け方が定着しつつあるようなのでやはり和大も分けて掲載すべきであろう。

⑫「九星」

これは旧暦で算出した誕生日をもとに自分の運勢を知る占いの一つである。ル和には「八白」だけはある。和大にも「九星」自体はある。しかし九星にはその数が示すように、「一白水星」から「九紫火星」など九つある。それを表形式などですべて示し英訳を加えることもユーザーフレンドネスを追求するオンラインディクショナリーの和大部分門の使命であると考えられる。

⑬「加速損傷」

武道の必修化が取り沙汰されているが殆どの学校で柔道が授業として教えられることになったようだ。そこで新たに注目された語彙で「頭は強打しなくても頭が激しく揺さぶられることで静脈が切れる現象」という意味であるこの用語も必要であろう。

⑭「太鼓結び」

因みにル和にはすでにあるのだがこれは重要な日本文化である女性の和服の着付けの分野では必須の語彙だと思われる。従ってこのように抜けている語彙を掲載する必要がある。

⑮「日本老年社会科学会」「日本老年看護学会」

和大には「日本老年医学会」は掲載されているが上の2つも加える必要がある。

5) クロスレファレンスの充実

クロスレファレンス（相互参照）に関しては辞書学の立場から小島がその著の中で、「相互参照は辞書のひじょうに大切な要素で、文法事項のみならず擬音・類義・語法・類義語など、あらゆる分野にわたって縦横に行われなくてはならない。いわば辞書を生き物たらしめる血液のようなもので、相互参照だけを見て辞書のよし悪しを判断できるといっても過言ではない」と述べている⁵⁾。筆者も編集実務を通してこのことを痛感しており和大にはかなり取り入れられていると感じているが、さらなる充実の必要性も感じている。以下の具体例を通してそれを訴えたい。

①「賃金不払い残業」「サービス残業」

両方ともKODにも掲載される予定であるが、より一般的に言われる「サービス残業」に対して、より専門的であり説明的な言い方だと思われる同義の「賃金不払い残業」とのクロスレファレンス（相互参照）をしっかりと載せるべきであろう。

②「不知火型土俵入り」

この用例は既にあるが別にある「土俵入り」のところにもこの用例は入れることで相互の参照を可能にさせたい。辞書学の立場から中尾は「関連事項・関連語について辞書の中に分散したままで相互参照を徹底させることによって体系的な語義記述を可能にすることもできるし、またできるだけそれらの集中化を計って（*sic*）同じ効果をあげることもできる⁶⁾」と述べている。しかし筆者は和英辞典の編集実務を通してこの2つの方法の分散化と集中化の両方を同時に採用する方向で相互参照を図るのが最もユーザーフレンドリーな辞典を作った

5) 小島義郎『英語辞書学入門』三省堂 1984 p.127 ll.7~11

6) 中尾啓介『辞書学論考』研究社 1993 p.60 ll. 1~4

めには必要なことなのではないかと痛感している。

③「睥島（ランゲルハンス島）」

2012年6月15日の読売新聞は現在注目されているiPS細胞に関する報道を掲載している。その記事の中に「睥島（ランゲルハンス島）」が出てくる。この2つの言い方は既に和大にもある。しかし問題は現段階ではこの2つが別々にあり、クロスレファレンスがないことである。是非相互参照を入れたい。

6) 加えたい略語

①「文通費」

2013年1月28日の読売新聞によると、この「文書通信交通滞在費」の不正流用が問題になったようだが、この略語である「文通費」を載せるべきであろう。現段階ではKODでは用語全体の末尾にその略語であることを「＝文通費」などと示す場合と、別に「文通費」を示しそこに⇒を示してクロスレファレンスさせるという2つのやり方が混在している。恐らく語彙の重要度を考慮し使い分けているのであろう。しかし矢印による別立てで処理する場合はあってもいいものの、全体語の後も同時に示していくことがよりユーザーフレンドリネスにつながるはずだとオンラインディクショナリー・メンテナンスの立場から考えている。

②「スティーブンス・ジョンソン症候群」

KODは医療・薬学用語の豊富さでも定評があるようで好ましいことと思われる。しかし時として略語が掲載されていない場合も散見される。この場合も（STS）などと示したい。

③「中央環境審議会」

すでにあるこの全体語の後に「中環審」を載せたい。

7) 用語の揺れの問題

①「ロボット掃除機」

既にある「掃除ロボット」と同義であることは誰にも推測できるであろう。しかし

このような比較的新技術に関するものを中心として用語が完全には定着していないのが現状である。このような場合には参考として「グーグル検索」でのヒット数を調査することが多い。検索の結果「掃除ロボット」が179万件、この「ロボット掃除機」が153万件でやや現在あるものの方が多い。しかし両者のヒット数がかなり拮抗している。この検索結果は2013年3月というある時点での検索でしかありえず、時間が経過すればその数は変化してくると考えられる。即ちこの結果の多少は逆転することも大いにありうることである。このような場合は伝統的な紙ベース時点や電子辞典のソフト情報ではかなり判断に迷うことが多かった。しかしその点オンラインは有利である。なぜなら内容変更、内容の付け加え及び削除がいつでも可能であるからである。従ってこのような場合には迷うことは原則として避け、両方とも載せるという方向でその場を処理しその後の経過を見るという方法を採る事がベストなやり方であると考えられる。

②「給料明細書」

同義の「給与明細」は既にあるし、この言い方の方がよく聞く、人口に膾炙したいわゆるハウスホールドワードだと思われる。メンテナンスの作業をしている際にはこのようないわゆる直感的語感も大いに役に立つのである。試しにこれらの2つをグーグル検索してみると、やはり「給与明細」が117万件、「給料明細書」が5万7千600件で圧倒的に前者が多い。しかし考えてみると後者の方が正式な言い方だとも思われる。このような場合は単なる用語の揺れと簡単に片付けるべきではないとも考えられる。因みにル和には「給料明細書」もある。これらを総合的に判断し両者を載せることとしたい。

8) 新聞を中心とするジャーナリズムが流す不適切な語彙の問題

インターネットの普及に伴い責任の所在が判然としない情報が増加すると共に加速度的

に不適切な語彙使用例も増えた。もちろん新聞はネットとは異なり新聞社の責任もあり、かなり語彙の使用は正確だと思われる。しかしながら優秀な記者ではあろうが時間的な制約の問題などもあり時として結果として新聞には、誤りだと思われる誤用例も散見されるのが現状である。筆者はオンラインディクショナリーのメンテナンスの作業者として「読売新聞」を毎日すべて目を通しており、名誉のために述べておくが当新聞の誤用例は他紙に比してかなり少ないという印象がある。日刊紙(デイリー)という編集上の時間的制約を考慮すると当紙に対しては大きな尊敬と信頼を寄せている。かつてメンテナンスのためにウィークリーであるビジネス誌も使用してみたがウィークリーという時間的な制約という点でより余裕があるはずであるにもかかわらず、かなりその誤用例は多かった。その結果本社の意見もありデータソースとしては没とした経緯もあった。

①「国際会計基準」(International Financial Reporting Standards)

2012年11月25日の読売新聞は「国際会計基準」の説明のくだりでその英語表記を上のように示している。しかしながらこの「国際会計基準」は正しくは、International Accounting Standardsであって、上記の英語表現はすでにKODにもある、[国際財務報告基準]のものである。

②「緊急被曝治療」

これは厳密には誤用とは判断できない。しかし既にKODにもある「緊急被曝医療」がより一般的な用語であろうと思われる。それはグーグル検索のヒット数の比率が557件対8万3千100とかなりの差であることから明らかであると考えられる。

③「ピクルボール」

これはいわゆる、新しいスポーツであるニュースポーツの一種である。このような新しい語彙の場合そのカタカナ表記は多少神経を使うべきであろう。より一般的には「ピクルボール」と表記すべきだろう。これも2013年3月の時点のグーグルヒット数が4対1,240とかなり一方的であること

からも明らかだと思われる。

の表記法を統一する必要があるだろう。

9) 表記の要統一性

①「PAとSPF」

これは日焼け止め化粧品の紫外線A波の防止効果を表す表示である。しかしながらこれらの表記にずれがある。具体的には、前者は「PA表示 [指数]」a PA label; PA labelingであるのに対し、後者は「エス・ピー・エフ (SPF) [B紫外線に対する防御効果を示す指数] (an) SPF sun protection factorの略 [=⇒ピー・エー] となっており、レファレンスも追加されている。またその用例として「SPF値」があり、さらに「SPF値50の日焼け止め剤」a sunscreen with an SPF of 50. という句例も載せている。両者の表記の統一性プラスその説明、訳、用例などの踏み込み方のバランスが必要であろう。

②「ウイлта」「ニヴフ」「サルタン」

これらは少数民族の名前である。しかし「ニヴフ」だけは「～語」と「～人」の2つが用例としてあるものの、その他の語は両方ともあるわけではない。可能ならばこれらも用例の更なる充実も考慮しすべて入れたい。

③「パラセル (西沙) 諸島」「スプラトリー (南沙) 諸島」「マックレスフィールド (中沙) 岩礁群」

これらは2011年9月23日の読売が最近の領土問題に関連して報道したものであるが、最後のものだけは現在「中沙諸島」での掲載があるが他の2つにはない。表記法での統一が必要であろう。

④「英国の大衆紙」

2012年1月31日の読売が「英国の大衆紙」として「ミラー」「サン」「メール」「エクスプレス」を紹介している。現段階のKODには前の2つの語彙はある。しかし後者の2つはない。まずこれらを加えるべきである。さらに既にある「ミラー」には説明として「英国の日刊大衆紙」とあるのに対し、「サン」の方は単に「新聞紙名」とある。後者の2つを付け加える際にもすべて

10) 日本史における用語および国際舞台で活躍する日本人の名前の取り扱い

①「蘇我馬子」

いわゆる歴史上の人物の中で海外の人物名は掲載されていることが多い。しかし日本史上の人物となるとかなり著名だと思われるものも抜けがあると思われる。もちろん「聖徳太子」などはある。しかし「蘇我馬子」がない。他に「蘇我蝦夷」や「蘇我入鹿」も入れたいところである。

②「小澤征爾」

カラヤンは非常に有名な指揮者であるから当然掲載がある。しかし現代人に関しては、今まで和の大編集方針として日本人は掲載せずとなっている。しかしながら編集実務者としての筆者の意見としては国際的に認知されている日本人は国籍を問わず掲載すべきではないかと考えている。是非この考えを反映させたいと考えている。

11) 情報内容の刷新

①「消費科学連合会 (現・財団法人消費科学センター)」

これは2012年10月25日の読売新聞の記事の中の記述である。しかし未だKODの記述内容は元の団体名のままである。これらの新情報への変更を促すのも当然メンテナンスの仕事である。しかしオンラインディクショナリーとは銘打ってはいても実際に内容を刷新するには多少のタイムラグがある。当然そのラグが少なくなるのが理想ではあるのでその実現を目指したい。

②「日本スポーツ振興センター (旧称NAA SH)」

現段階ではこれも古いデータのままである。早急の更新が必要である。

③「朴槿恵」

既にあるものの、彼女は最近韓国の大統領になったことは周知の事実である。従ってその記述内容の刷新が必要である。

④「ハッサン大統領」

いささか政情不安が伴う国では政治上の

リーダーの変化も激しい。これはモルディブの大統領が最近、モハメド・ナシードがハッサンに変わった。KODのオンライン版では新語はEV語 (evolving: 「進化する語彙」) として示している。しかし変化の激しいこのような分野には時々起きることではあるが、載せた直後でまた変更が余儀なくされる。面倒ではあっても事実は事実としてその都度変えていく必要がある。

⑤「国民民主連盟 (NLD)」

これはアウンサン・スーチーの率いる政党であるが、2010年一時軍政権の下で解党された。しかしこれも周知の事実としてスーチーは政権に復帰し党も復活した。ミャンマーの5つの政党名はすべてKOD情報にあるが、このNLDに関しては記述を変更する必要がある。

⑥「国立高度専門医療研究センター」

今のものは「研究」の部分がない。ひょっとすると記述の誤りの可能性を探ってみたが、これは歴として新しい団体であることが判明した。よって別のものとして採用する必要がある。

⑦「強盛国家」

キムジョンウンはかつて「強盛大国」の旗印を謳っていたが最近若干トーンダウンして「強盛国家」になったようだ。それ故、定着するかどうか見届けることも選択肢としてありうるものの、オンラインディクショナリーの性質上ユーザーフレンドリネスの最重視しまず現在ある「強盛大国」にこれを加えるべきであろう。

12) 言い換えを示す [] 及び省略可を示す () の多用

①「メタゲノム解析」

現在「メタゲノム研究」はあるがこの用例で検索するユーザーのために言い換え部分を [] で示し、「メタゲノム研究[解析]」としたい。

②「災害弔慰金支給法」

現在「支給」の部分のないものはある。しかしこのようにあるものもないものとのグーグルヒット数の比率は1万4千200対

1万3千700とその差が少ない。このような場合には省略が可能であることを示す () を使用したい。具体的には「災害弔慰金 (支給) 法」としたい。

③「連結業績予想」

これは2013年2月6日付けの読売の記事にあった用語である。しかし現在KODの情報として「連結業績見通し」があるので、言い換えを示す [] を使用により合体させ、「連結業績予想 [見通し]」としたい。

④「唐草文様」

今あるものと合体させて「唐草模 [文様]」としたい。

⑤「国際電子出版フォーラム (IDPF)」

今あるものは「電子」の部分「デジタル」となっている。合体させ「国際電子 [デジタル] 出版フォーラム」としたい。

⑥「日食めがね」

今ある「日食グラス」と合体して「日食グラス [めがね]」としたい。

⑦「区間記録」

これはすでにある「区間新記録」と合体して省略可能な「新」を () 内に入れ、「区間 (新) 記録」としたい。

⑧「恵比寿講」

今は「恵比須講」であるが言い換え可能を示すため「恵比寿 [須] 講」としたい。

⑨「高齢化比率」

今は「高齢化率」なので () を使い「高齢化 (比) 率」と表記したい。

⑩「鉄酸化菌」

この変化形の「鉄細菌」「鉄酸化細菌」はすでにあるので、() の二重使用で、「鉄酸 (化) (細) 菌」としたい。

13) 短命で終わったり定着しない可能性のある語彙や過去のものとなった語彙の扱い

①「新党きづな」「新党大地」「新党日本」「太陽の党」

これは政党名であるがいずれも短命で解党となり過去のものとはなった。しかし日本の歴史でこういう事実があったことを示す必要も想定できる。故にこれらも残すことがユーザーフレンドリネスの原則に則す

はずである。

②「美魔女」

これはいわゆる流行言葉の類と考えられる。意味は最新式美容技術や化粧技術の効果によって中年以降になっても外見的には若く美しく見える女性、である。この言葉の紹介が2012年2月21日の読売新聞に掲載された。それによると「美魔女コンテスト」なるものも行われており、かなり一般に浸透してきた語彙であるようだ。積極的に必要性は余り感じないかもしれないが、入れておくのがいいのではないかと思われる。

③「枝る」「錯覚揺れ」「まじ揺れ」「明かり奉行」「節女」「エアーン」「捨て寝」

ここまで来ると、多分必要はないと思われる。しかし最近には特に中高生が使用始めているようだ。2012年1月14日の読売新聞によれば、これらの語彙は国語辞典を発刊する大修館書店が全国の中高生を対象として行った国語辞典に載せたい言葉コンテストの結果優秀賞に選ばれた語彙であるようだ。それぞれ意味は「極限まで睡眠を取らないこと」「地震が来ていないのに揺れているように感じてしまうこと」「前者の対義語」「無駄な照明を消して回り、節電が好きな女性」「その場の雰囲気に入る」「テスト前日に勉強せず早々に寝てしまうこと」だそうである。KODの方針としては特に採用するわけではない。しかし今後定着する可能性を探るのがいいのではないかと思われる。なぜなら、出現した時点ではここまで定着するとは思われなかった用語として、トム・ガリー氏が論文の中で「萌え(moe)」の例を挙げており、KODの英訳説明として {used among anime and manga fans; an infatuation} a fascination

《with …》; a crush 《on sb》;⁷⁾を挙げている。

7) *English Lexicography in Japan* The Jacet Society of English Lexicography Taishukan Publishing Company 2006 p. 101 ll.29~31

14) 有用だと思われる用例語・用例表現の追加

①「前へ倣え」

「倣う」の用例表現としてあってもいい。因みに「左[右]に倣え」はある。

②「犯行態様が酷似している」

このよう用例表現を「犯行態様」にプラスしたい。

③「義務的管轄権」

これに「義務的管轄権を受諾する」の用例表現をプラスしたい。

④「にやける」

2012年9月21日の読売新聞は文化庁が行った「国民世論調査」の中で意味の取り違えの例としてこれを挙げている。和太はこの正しい意味の「なよなよしている」に加えて誤用例としての「薄笑いを浮かべる」の文例が掲載されている。しかし市民権を得たと思われるこの誤用をあえて掲載するならば、その旨を付記する必要がある。

⑤「平均走行距離」

この語彙に対し、「平均走行距離は〇〇kmである」などの用例文を加えると面白いと思われる。

⑥「足じゃんけん」

「じゃんけん」に「足～」の用例を加えたらどうかと思われる。

⑦「保護観察付き執行猶予」

これに「～3年の有罪判決を受ける」など使用頻度の高いと思われる文例を加えたい。

⑧「行動履歴」

これに「ユーザーの～を分析する」などの用例表現を加えたらどうだろうか。

⑨「絵文字」

これに「彼女からのメールは～だらけだった」などの文例を加えたらいいと思われる。

⑩「未必的な殺意」

今は「未必の故意」で独立的にある。これはこれで結構だと思われるものの、この変化形を入れるべきではないだろうか。

⑪「不祥事」

これに「～が相次ぐ」を加えることが有

用ではないだろうか。

⑫「法的拘束力」

有用だと思われる用例表現「～がある
[ない]」を加えると面白いと思われる。

15) 辞書間での誤差の解消

①「ジョンソンアンドジョンソン」と「ジョンソンエンドジョンソン」

これは2012年10月7日に読売新聞が示した「米国の就職人気ランキング」で第6位に入った「ジョンソン&ジョンソン」の「&」の読み方が同じKODに入っている辞書間で違いがある。具体的には和大では「エンド」と読んでいるのに対し英大を初めとしてその他の辞典では「アンド」と表記している。同じKODを検索するユーザーが増加する中でどちらかに統一するか異なる読み方を併記する必要があるようだ。

②「海兵空陸任務部隊」

同じKODに入っている「リーダーズプラス」では「海兵隊空陸任務部隊」であり、和大のE Vでは「海兵空陸機動部隊」であるがその英訳語は同じa Marine Air-ground Task Forceである。どれかが決定的な誤りとは断定することは難しいもののどちらかに統一することがユーザーのためにいいと思われる。

16) 訳語の充実

①「問題冊子」test book

2013年1月21日にある大学で受験生が「問題冊子」を持ち出したというニュースが読売新聞で報道された。現在のKODの和大の訳はtest bookletとなっている。しかし「TOEICテスト」でもtest bookを入れるべきだと思われる。

②「社会的企業」social business

今の和大の英訳はsocial enterpriseであるが、social business を加えたい。因みにグーグルヒット数でも大差はない。

③「ビジュアル(V)系」

今の和大の訳はやや貧弱さを感じる。ここでも小型の和中の訳を参考として一工夫が必要だろう。

④「審判」

2012年2月3日の読売はこの用語を次のように説明している。「公取委の行政処分について、企業などが公取委に異論を申し立てる制度で、公取委職員である審判官が担当する。裁判の第1審に相当し、審決に不服の場合、東京高裁に提訴できる。「検察官と裁判官を公取委が兼ねるようなもの」との批判が強く、制度を廃止する独禁法改正案が国会に提出され、継続審議になっている」これを踏まえると現在の和大の訳ではこの意味合いがカバーできていないのではないかと懸念される。さっそくこの問題を解消したい。

17) 対応語・類義語などの語彙の充実

①「共同管理区域」

2012年10月7日の読売は北朝鮮と韓国の国境近くにあるこの区域の名称が和大にない。

問題はその類義語と思われる「共同警備区域」はあるのにこれがない点である。是非入れたい。

②「飼料用米」

すでにある「加工用米」のペアとして必要だと思われる。

③「リメイク権」

すでにある知的財産の一つと考えられる「フォーマット権」のペアとしてこれも必要であろう。

④「世界華人保釣連盟」

領土問題に関して最近問題になっているニュースからの用語である。中国の活動家の団体である「中国民間保釣連合会」は存在するので台湾のこの団体も入れるべきであろう。

⑤「高度医療」

より使用頻度が多いと考えられる「先進医療」はすでにある。しかしこれは保険制度の用語であるし異なる概念を示す用語である。それ故同じジャンルの異なる用語として必要だと思われる。このことは読売新聞が2012年9月30日に説明している。

- ⑥「ハイパーカミオカンデ」
すでに掲載されている「スーパーカミオカンデ」に継ぐものである。是非入れたい。
- ⑦「囲卵腔内精子注入法 (SUZI)」
既に類義語の「卵細胞質内精子注入法 (ICSI)」が掲載されている。対応語として入れたい。
- ⑧「固定部分」
これは2012年6月1日の読売新聞のコメ農家の個別所得補償制度の記事の中にあっただけだが、対応する「変動部分」はある。対応する一方だけあるのはまずいし、バランスを取るために必要だと思われる。
- ⑨「コンボ方式」
すでにある「チャデモ方式」の対応する概念を示す言葉としてバランスを取るために入れたい。
- ⑩「個別自衛権」
すでにある「集団的自衛権」の対応語として必要だと思われる。
- ⑪「ダルトン極小期」
これは地球の気候変動を説明する科学用語である。すでにある「マウンダー極小期」に対応する語彙として必要だと思われる。
- ⑫「スネカ」
これによく似たものは「なまはげ」であるが既に掲載されている。それゆえこれも入れたらどうかと思われる。
- ⑬「上流部門」
これは産業界の用語であるが対応語の「下流部門」だけすでにある。対応語のこれを掲載したい。
- ⑭「週めぐり」
類義語の「日めぐり」「月めぐり」はある。これはあまり出回っていないかもしれない。しかし、2011年12月16日の読売にあるようにこれも使われ始めているようである。入れるべきであろう。
- ⑮「胸部突き上げ法」
これは既にある、のどに食物の部分が引っかかり呼吸困難に陥った人を回復させる方法である。その一つの方法である「背部叩打法」はすでにある。それ故その対応語と

して掲載する必要がある。

18) 語彙検索を容易にする語彙表記の工夫

①「木造軸組み工法」

これは建築用語の一つである。すでに「ツーバイフォー工法」がある。その対応語として必要であるのは17) に属するが、「み」を含まない「木造軸組工法」としてこの語彙を調べようと試みるユーザーのための便宜を図る意味でも「み」を()に入れて、「木造軸組(み)工法」としたい。

②「浮き足立つ」

これはすでにあるがユーザーのため検索を容易にするために、今の「浮き足立つ」に「(き)」を加え「浮(き)足立つ」としたい。

③「蛍光エックス線」

これは「X線」のところにあるが「エックス線」のところにでも入れることでユーザーの検索を容易にしたい。

④「真打ち」

今は「真打」だけであるが同様の理由から「真打(ち)」としたい。

⑤「ANSA通信」

今は「ANSA」の表記になっている。これは他の通信社の表記の同様である。しかし筆者もユーザーの一人としてKODを使っているがこの表記法での検索も可能としたい。

19) 意味の追加

①「ハイウエー」

2012年11月7日の読売新聞は「主な漁船と大型船の航路「ハイウエー」のイメージ図」としてこの意味を解説している。現段階のKODではこの意味の掲載がない。是非入れたい。

②「かぶりもの」

これは人がかぶる「ゆるキャラ」などの衣装などの意味がある。しかし今の和大では英訳がカバーしていないのではないかとと思われるので追加したい。

③「ジュレ」(ポン酢などをゼリー状にした調味料)

この意味を訳語に入れたい。

④「マイコン」

普通に使われる意味の記載は当然あるのだが、2012年5月29日の読売新聞では「マイクロコントローラー」の略語として説明している。この意味を訳語に追加したい。

⑤「エコドライブ」

これは2012年8月8日の読売新聞が説明している用語であるが自動車のドライブ技術ではない。これはシチズンが開発したとする太陽光など光で発電し、腕時計を駆動させる技術である。この意味を加えたい。

⑥「中心線」

2012年5月13日の読売新聞は約一週間後に迫った金環日食の記事の中でこの用語を使っている。即ち天文用語の一つである。それ故一般に使用される意味ではない。「金環日食が最もきれいに見える線上の地域」を示す。従ってこの意味を加える必要があると思われる。

⑦「サーキュレーション」

当然そのものずばりの意味はあるものの、米国の医学誌名としての意味を加えたい。

⑧「オートマタ」

やや特殊であるが「ヨーロッパ経由のからくり人形」の意味をプラスしたい。

⑨「カンファレンス」

単なる会議の意味ではない。スポーツ用語として米国のプロバスケットボールのNBAの用語として「東カンファレンス」「西カンファレンス」などの意味をプラスしたい。

⑩「踏み台」

サイバー攻撃の際に中継点として利用するパソコンなどのコンピューターを指す。この意味を加えたい。

20) 英和・和英の相互補完性の拡大

これは15) で見た辞書間の誤差の解消の問題にも通じるが、特に英大と和大的間で相互補完性があるので是非これを相互の編集者がデータを交換してその拡大や増大を図るべきではないかと考えている。以下その具体例である。

①「アルコール・たばこ・火器取締局 (ATF)」

これは英大、和大本共に掲載しているが訳語に違いがある。このような場合は相互に意見交換を図り内容のグレードアップを図るべきだろう。

②「ヘッドバン (ヘッドバンギング)」

() 内のものは英大にはその記載がある。「ヘッドバン」は別物として和大にある。これも英和と和英でデータ交換を図りたい。

③「ビブリオバトル」

これは大学生などがお気に入りの本の魅力を発表する一種のコンテストである。日本で始まったとされることからまず和大には採用の予定である。しかし日本から発信する英語は増える傾向にあることから英大など英和辞典にも入れる可能性を考えるべきではないだろうか。

④「激戦州」

これは米国大統領選で使われる語彙である。当然それを示す英語としてのswing stateは英大にはある。和大には今「激戦区」「激戦地」など日本における概念を示す言い方がある。しかし語彙のボーダーレス化が増大する環境の中で和大にもこの「激戦区」の記載は必要ではないかと思われる。

⑤「キロバイト」「メガバイト」「ギガバイト」「テラバイト」「ペタバイト」「エクサバイト」「ゼタバイト」

これは2012年5月19日の読売新聞が紹介したコンピューターのデータ量の単位である。しかし不思議だと感じることはこの全てが和大には採用されているのに対し、実際の英大には全てが採用されているわけではないことである。是非双方に入れたい。そうすることでオンラインディクショナリーの機能性も高まると考えるからである。

⑥「搾り取られる中間層 (squeezed middle)」

この語彙は2012年2月8日の読売によれば、2011年に英国でオックスフォード英語辞典が「今年の言葉」に選んだものである。しかし現時点で英大にはこの語彙のエント

リーがない。英和担当者は是非これを採用すべきであろう。それに合わせて和大にも入れたい。

⑦「フェアリーサークル」

これは草原の中に突如出現するとされる直系3～5メートルほどの円形のものである。この現象のメカニズムは今も謎に包まれているそうである。現時点で英大にはこの意味がない。是非入れたい。

⑧「外国諜報活動監視法」

今は和大では「監視」の部分が「偵察」である。英大ではこのままの「監視」である。しかしグーグル検索などの結果から今の和大の「偵察」が最適だと判断される。従って英大もこれに合わせて「監視」としたい。

21) 人名記述における没年及びその他の情報のスピーディーな追加

①「ホイットニー・ヒューストン（2012年2月11日死亡）」

海外の有名人の記載はかなり充実している点は和大の誇りだと思われるしそのような定評も確立されている。しかしオンラインの特性を活かして可能ならば一日でも早い記述の更新が望まれるが現実にはそれが実現するまでにはそれなりのタイムラグのあるのは残念である。没年などマイナーな情報であると言ってみればその通りであろうがオンラインでは可能だけに情報更新のタイムラグは可能な限りなくしていくことがユーザーフレンドリネスの原則に則っているはずである。その他の有名人としては他に「アンディ・ウイリアムス」「マラウィの大統領、ムタリカ」「2013年の元日になくなったパティ・ページ」などの没年の記載が待たれる。またさらにこの原稿を処理しているこの瞬間に偶然か「サッチャー元英国首相」の死亡のニュースが流れた。当然彼女の没年の記載にもスピーディーな対応が必要だろう。

②「障害者総合支援法」

すでに「障害者自律支援法」はある。しかし政権が民主党から自民党に代わった今、

この法律名がやがて2013年4月時点でこのように変更になる予定である。このように事前に明らかなものを出来る限りタイムラグを減らす意味でも前もって対応するなどの準備が必要ではないだろうか。

22) 誤ったインターネット情報の問題

これは辞典編集者にとって大きな問題とリスクである。それ故少なくともKODではメンテナンスを担当する者としての基本的な編集方針として、ソースをネットからは採らないというのが原則を貫いている。ネットからソースを採れば対応としては時間的に有利ではある。また小さな努力で一度に大量のデータの採取が可能になる。しかしながらインターネット情報は情報源が特定されないものも多く間違った情報を流してもその責任の所在が明らかでない場合が多い。それに情報ソースとして時間的にはスピードという利点はあっても用語の揺れも問題も多く、新聞とは異なり責任所在が明らかでない点もさることながら、用語や表現が人口に膾炙されたハウスホールドワードとはなりえてない場合も多い。当然グーグル検索などによるおおまかな語彙の使用頻度を調査するにはなくてはならない便利なツールではある。しかしKODでは情報ソースとしてはインターネットは使用しない。それ故この項目での具体例はない。

23) 新しい法律名の扱い

①「宇宙開発利用促進法」

②「死因究明推進法」

③「偽造品取引防止協定」

2012年9月8日付けの読売は政府提出で通常国会で成立した「改正地域再生法」などの合計55の法律を報告し、翌日9月9日付では議員立法で通常国会で成立した「死因究明推進法」など合計30の法律に加え「改正欧州復興開発銀行設立協定」など合計4の条約を報告している。オンラインディクショナリーKODのスタンスは法律名は可能な限り掲載していくというものである。従って9月8日の合計55のうち前述の「改正地域再生法」など「改正…」とあるものを除き「宇宙開発利用

推進法」などの14の法律を載せていく処理をした。また9月9日分の合計30の法律のうち「改正過疎地域自立促進法」など「改正…」とあるものを除く前述の「死因究明推進法」など17の法律を載せていくように進言したし、4つの条約の内、前述の「改正欧州復興開発銀行設立協定」など前に「改正」とつくものを除き、「偽造品取引防止協定」など2つを掲載すべく進言をした。筆者はこのように掲載すべきものを選択して本社にデータを送るのが自分の責任である。しかしこの後英米人スタッフが中心となってその英語訳を加えていくという重要かつハードな任務に移る。普通の辞典ならこのような法律名や団体名などの固有名詞は掲載しないポリシーを採るのが通常である。しかしKODは英語研究者、翻訳家、通訳、英語教師のようないわゆる英語のプロと呼ばれる人達を初めとして、ビジネスマン、エンジニア、TOEICなどの受験者や大学生などの広く多様なニーズに応えるべく以上のような固有名詞も積極的に掲載することで、如何にその作業が大変でも、加速度的に変化する社会に対応するというオンラインディクショナリーポリシーを貫くことで、その特性を発揮していく体勢を採り続けている。

24) 新しい和製英語とカタカナ語の扱い

和製英語は英語の原義とは異なった方向に発展し使用されているいわゆる英語もどきの日本語と考えられる。このような例は他のアジアの言語でも存在するようではあるが特に日本語に多いようである。その点ではその逆現象と思われる、日本語の原義と異なる英語はないのか、かねてから疑問に感じていたが、最近和大的共同執筆者であり東京大学の准教授であるトム・ガリー氏が自らの論文の中でkimonoの例を挙げて論じている⁸⁾。このような日本語もどきの英語も存在するのである。しかし数的には日本の和製英語に対して圧倒的に少ないのが現状である。そればかりか一

⁸⁾ *English Lexicography in Japan* The Jacet Society of English Lexicography Taishukan Publishing Company 2006 pp.97~98

時下火になったと見受けられた和製英語であるが最近また復活の兆しがあるように感じられる。しかし最近生まれたばかりと思われる和製英語は英語の立場から見てもなかなか粋なものが多いという印象があるのがその特徴でもある。以下その具体例とその考察である。

①「シェアハウス」

2012年9月4日の読売がこれを「個室でプライバシーを保った生活をしながら、共用のキッチンやリビングルームなどで入居者同士のつながりも楽しめる。音楽好き同士が入居したり、障害者と健常者が一緒に暮らしたりと、タイプも様々だ」と紹介している。これは一種の新しい和製英語と考えられる。和製英語は一見英語らしく見える性格上、英語学習者にとって一種の障害となりうる。従ってオンラインディクショナリーのメンテナンスの責任としてこまめにチェックしていく必要があるだろう。因みにこれを英語で正しく言うのであれば、house-sharingなどがありうるだろう。

②「クールシェア」

2012年7月26日の読売はこれは次のように説明している。「涼しさを分け合う、という意味。環境省が今年、クールシェア事務局と連携して推進している国民運動」なんでも、企業・団体・個人がクールシェアスポット（涼むことが出来る場所）をオンライン上でマップに登録する仕組みらしい。これも新しい和製英語と思われる。

③「JISART（ジスアート）（日本生殖補助医療標準化機関）」

これは現在のKODにも記載はある。しかしよりユーザーフレンドリーにするために、カタカナ語の見出し語も作るかもしくはクロスリファレンスで対応するかななどの措置を図りたい。

④「MAGTF（マグタフ）（海兵空陸人身部隊）」

これも既に掲載されているが、「マグタフ」というカタカナ語からの検索も出来るようにしたい。

⑤「オフサイトセンター（OFC）」

この掲載も既に成されているが、この

「OFC」という一見して和製英語と思われる略語も少なくとも付記するのが適切だと思われる。

⑥「サービスイリア (SA)」「パーキングエリア (PA)」

これも既にあるが、「SA」と「PA」という和製英語の略語を付記したい。

⑦「レアプラント (希少植物)」

これも既に記載があるが問題は現段階のKODは「希少」の所の句例として「希少動植物[野生動物]」rare [scarce] fauna and flora [wildlife]. scarce plant となっていることである。しかしこれは「希少動物」とカタカナ語の「レアプラント」の見出しを立てて読者の便宜を図るべきだろう。

25) わかり易い説明の追加

①「サーフェス」

これは単なる「表面」という意味ではなくアメリカのマイクロソフト社が発売することになったタブレット型多機能端末のことらしい。特にコンピュータソフトなどハイテク分野の発達はまさに日進月歩である。しかしこのカタカナ語の意味を早く掲載していかななくてはならないだろう。

②「ペプラム (ウエスト部分のひだ飾り)」

これは既にあるが今の和大には【洋裁】としてa peplumがあるだけである。その点ではリーダーズではかなり詳しい説明があるのでそれを参考にして和大にも説明を加えたい。

③「コンティンジェンシープラン (緊急時対応計画)」

これも既にあるが是非この()内の日本語を付記したい。そうすることでこのように意味が捕らえにくいカタカナ語の意味を読者は容易に捉えることが出来よう。

④「先進安全自動車 (ASV)」

2012年5月24日の読売は最近頻繁に起きる自動車の対人事故を減らすために工夫をこの言葉で紹介している。これも既にKODは採用しているが、ASVを見出し語としている。しかしまだ市民権を確立しえてないこのような語彙は「先進安全自動車」と

いう日本語語彙からも検索できるように工夫すべきだろう。

⑤「カンガルーケア (早期母子皮膚接触)」

これも既にあるが、カタカナ語の見出しはいいがこの漢字表記の意味を付記すべきではないだろうか。

26) 英米以外のものの追加

①「民主党」「闘争民主党」「ゴルカル党」「グリンドラ党」「福祉正義党」「ハヌラ党」

これらの政党名はインドネシアのものである。この中の2つ即ち「闘争民主党」「ゴルカル党」はすでにある。とかく和大を中心とする和英辞典は日本の事象は当然掲載するがその他の地域のもは英米のものを中心に記載してきた。しかしグローバル化とボーダーレス化の流れの中で、今後は世界の事象で日本に関係すると思われるものはどの地域のものでも積極的に掲載すべきではないだろうか。これは本章の冒頭でも見た1)より高度な客観性・普遍性を目指すことにもつながると思われる。

27) 微妙な日本語表現の強化

最後の項目であるがこれは和英辞典の命とも言えるものである。既に和大は日本最大の和英辞典として「微妙な日本語表現」もかなり充実していると定評があるようだ。しかしこれで満足してはいけないうけでさらに強化すべきだと思われる。最近の日本語は使い方が多様になってきている。筆者が個人的に特に感じる分野はスポーツにおける表現である。例えば、連続スリーボールを投げてしまい窮地に陥った投手がストライクを取りたい一心で「次の一球を置きにいく」などと表現する言い方である。この点は筆者が既に小論⁹⁾で見たところであるが、その訳を担当したトム・ガリー氏も大いに苦労したとの後日談を聞いた。ではスポーツ以外でも微妙な表現を以下具体的に列挙したい。

9) 須部宗生「ユーザーフレンドリーな大型和英辞典を考えるーオンラインディクショナリーの可能性ー」INEXUS No.2 異文化情報ネクサス研究会 2008 p.3 11.25~30

①「乗り」

この語彙に「軽い〜で…しまう」などの文例を加えるといいだろう。

②「大崩れ」

この語彙に「〜する」の用例が欲しい。

③「土手」

例えば野球の表現であるが、「二塁手はグラブの〜にボールを当ててしまいキャッチし損ねた」などを加えるべきだろう。

④「角度」

この語彙にサッカーの表現である、「彼は〜のないところから見事にゴールをした」などの文例を出したい。

⑤「続く」

ここに「最終回の追い上げで次に〜試合ができた」などを入れたい。

⑥「二桁」

ここに「日馬富士は何とか今日勝って勝ち星を〜に乗せた」などがほしい。

⑦「リセット」

ここに「私は…することで自分の気持ちを〜できる」などを入れたらどうだろうか。

⑧「お金」

「〜に汚い」はあるが「〜に細かい」をプラスすべきだろう。

⑨「血」

ここに「やがて経験が彼の〜となり肉となることだろう」を加えたい。すでに「血」「肉」をそれぞれ使った表現はある。しかしこのようにまとめた言い方がほしい。

⑩「得意料理」

この語彙だけの英訳を付記するだけでなく、これに「あなたの〜は何ですか」などの文例を加えるとユーザーフレンドlinessは増すのではないだろうか。

またさらにこの微妙な日本語表現の英訳を考える債に特に考える必要があるのは、例えば英語における意味の多様性から逆に日本語表現を見つめなおすことではないかと考えている。即ち例えば可能性を表すと思われるcanとbe able toに関してShibuyaは比較を考察し単なる禁止だけでなく、ルール違反などを暗示する少なくとも7つの意味範囲がある

ことを指摘している¹⁰⁾。和英辞典編集では、あながち日本語の微妙さだけに注意が集中しがちではあるが、このように微妙な英語の立場からも考えてみる必要がありそうである

VII おわりに

以上和英辞典の歴史、紙ベースの和英辞典改訂、オンラインディクショナリー、KODの順に見た後、特に和英辞典編集実務者としての経験から見た辞典編集上の改善点に関して考えてきた。既に述べたように筆者は最近10年近くはオンラインディクショナリーのメンテナンスという辞典情報内容の保全に携わってきたが最近特にインターネット上で、いわゆるオンラインディクショナリーと銘打ったものを目にすることも多い。しかしながらそれらは多くの場合複数の辞典情報をドッキングして単にネット上に公開したもののそのメンテナンスが十分でなく、内容の更新が不十分であることは否めない。特にこのようなサービスは論文やビジネス文書など正確さを必要とするものには使用すべきではないと思われる。当然のことながら社会の状況は刻々と変化する。従ってオンラインディクショナリーは情報内容も各社が責任を持って可能な限りにおいてタイムラグを少なくすることは当然のことで、さらにその情報内容の更新に随時努めなくてはならない。さもないと誤った情報を流してしまうことになる。特にインターネットユーザーの多い昨今ではこれは大きな社会問題だといえる。もちろん情報更新の管理をする者として完璧な仕事をしているという自信はない。しかし常に社会に対する責任と良心を持ちつつ努力してきたつもりであるし、今後もその努力を続けていきたい。幸いなことに、KODは英語の専門家や学習者だけでなく、多くのビジネスマンの間で高く評価され利用者も増加傾向にある。また利用者の中には海外で活躍する在留邦人も多い。彼らは特に日々日本を発信する必要に迫られていると言っても過言ではない。筆者はその

¹⁰⁾ *In Honor of Nobuyuki Higashi* edited by Sakutaro Takahashi, Kenkyusha 1995 p.385 ll. 14~21

ような人たちのために日々オンラインディクショナリーのメンテナンス実務者として、一年365日欠かさず新聞を読み追加語彙・用例の収集を行っている。この作業はまさにフィールドワーク的な性質の強く、自分の姿から弱音を吐くことなくもくもくと額に汗して働き続ける、トルストイの短編に登場する『イワンの馬鹿』の中のイワンを思い起こすことも出来よう。しかしオンラインディクショナリーの和英部門のメンテナンスの実務を任せられている一人として今後とも微力ながらこのような「イワンの馬鹿」的なアナログ的な努力を重ねていくことが筆者の社会的責務だと考えている。

参考文献等

- 竹林滋他『世界の辞書』研究社 1992
須部宗生「ユーザーフレンドリーな大型和英辞典を考えるーオンラインディクショナリーの可能性ー」INEXUS No.2 異文化情報ネクス研究会 2008
南出康世『英語の辞書と辞書学』大修館書店 1998
東信行『英語辞書の比較と分析』岩崎研究会編 研究社 2002
小島義郎『英語辞書学入門』三省堂 1984
竹林滋『辞書学辞典』研究社 2003
In Honor of Nobuyuki Higashi edited by Sakutaro Takahashi, Kenkyusha 1995
English Lexicography in Japan The Jacet Society of English Lexicography Taishukan Publishing Company 2006
ハワード・ジャクソン著 南出他監訳 『英語辞書学への招待』大修館書店2004
中尾啓介『辞書学論考』研究社 1993
辞書協会編『優良辞典六法目録』No.52 2001